

(添付資料)

1. 経営成績及び財政状況

全般的概況

当社グループの第1四半期(平成16年4月~6月)の経済情勢を概観しますと、世界経済は、原油価格の高騰やイラク情勢の混乱の長期化などの不安要因はありましたが、米国経済の底固い成長の持続や、中国をはじめとしたアジア経済の高い成長の維持により、引き続き好調に推移しました。また、わが国経済は企業の輸出や設備投資が好調に推移する一方、その好循環の影響が個人消費など家計部門にまで広がり、景気回復の持続性が増大しました。

このような経済環境のもと、当第1四半期における当社グループの売上高は、1,479億30百万円(前年同期比10.1%増)と国内外における設備投資の底固い動きに支えられ、前年同期を上回る水準となりました。収益面においても、今後の成長に向けた基盤構築をすすめる一方で、売上高の増加と前期までの構造改革により定着した収益体質が持続し、営業利益は152億6百万円(前年同期比53.8%増)、税引前純利益は150億84百万円(前年同期比51.3%増)、四半期純利益は96億5百万円(前年同期比58.3%増)といずれも前年同期を上回る水準となりました。

セグメント別の状況

インダストリアルオートメーションビジネス

国内においては、半導体製造装置や自動車をはじめとする製造業での機械・装置の需要が好調に推移し、各種制御用機器の売上が大きく増加しました。海外においては、景気拡大が続く東南アジアと中華圏で半導体・FPD(フラットパネルディスプレイ)業界向け商品が好調に推移しました。また、北米においてはモーションコントロールや光電センサなどが、欧州においては基板検査装置やモーションコントロールが、それぞれ好調に推移しました。

以上より当セグメントの当第1四半期の売上高は、639億79百万円(前年同期比17.4%増)となりました。

エレクトロニクスコンポーネンツビジネス

国内においては、半導体業界向け各種組込み機器が好調に推移したほか、パチスロ業界向けコネクタの売上が大幅に伸びました。海外においては、世界的な携帯電話市場の好況を背景に携帯電話用LEDライトモジュールやFPC(フレキシブルプリントドサーキット)コネクタの売上が増加しました。また、通信インフラの急速な整備が図られている中国・欧州のIT業界や東アジアのエアコン業界向けの各種機器も好調に推移しました。

以上より当セグメントの当第1四半期の売上高は、248億34百万円(前年同期比11.2%増)となりました。

オートモーティブエレクトロニックコンポーネンツビジネス

車載電装市場は、国ごとの増減はあるものの世界全体としては自動車販売台数の好調さ

(添付資料)

を背景に引き続き需要の拡大が継続しています。しかしながら、競合の激化や価格の下落の継続に一部客先の不振が重なり、当セグメントの売上高は149億13百万円(前年同期比2.2%増)となりました。

ソーシャルシステムズビジネス

電子決済システム事業は、ATM(現金自動預金支払機)や紙幣自動両替機の新紙幣発行対応としての更新や改造の売上の一部が、新紙幣発行時期の延期の影響により当期の第2四半期へ移行しました。しかし、駅務システム事業が電鉄各社の旅客サービス向上を目的とした主要機器の更新が当第1四半期へ前倒しされたこともあり、当セグメント合計の売上高は264億74百万円(前年同期比3.2%増)となりました。

ヘルスケアビジネス

国内では、体組成計や血圧計が引き続き好調に推移しました。特に体組成計は、商品宣伝の効果もあり大幅に売上を向上させることができました。海外では、北米において血圧計、歩数計が好調に推移しました。また、欧州においては血圧計の需要が堅調に推移、アジアではベトナム、インドネシアでの血圧計の売上が拡大するなど、血圧計を中心に引き続き好調に推移しました。この結果、当セグメントの当第1四半期の売上高は、123億76百万円(前年同期比5.8%増)となりました。

その他

その他のセグメントは、コンピュータ周辺機器事業での市場価格の低下、またエンタテインメント事業での業務用ゲーム機器の競合激化など厳しい状況が続きました。当第1四半期の売上高は、53億54百万円(前年同期比4.9%減)となりました。

財政状況

総資産は前期末に比べ37億68百万円増加して、5,960億41百万円となりました。また、株主資本は前期末に比べ167億33百万円増加し、2,914億43百万円となりました。この結果、株主資本比率は前期末の46.4%から48.9%になりました。

キャッシュ・フローの状況については、営業キャッシュ・フローが四半期純利益の増加の一方で、たな卸資産が前年同期比で増加した結果、106億89百万円のインフロー(前年同期比35億3百万円のインフロー減)となりました。投資活動によるキャッシュ・フローは、資本的支出が前年同期比で下回ったことや前年同期に京阪奈研究所設立の支払いがあったこともあり、53億79百万円のアウトフロー(前年同期比6億80百万円のアウトフロー減)となりました。また、財務活動によるキャッシュ・フローは、記念配当による支払配当の増加がありましたが、前年同期に比べ借入金の返済額が減少したこともあり、合計では当第1四半期は前年同期並みに推移し、35億28百万円のアウトフロー(前年同期比1億25百万円のアウトフロー増)となりました。

現金及び現金同等物の当第1四半期末残高は、前期末に比べ19億3百万円増加の969億62百万円となりました。

(添付資料)

当期の業績見通し

第2四半期以降の経済環境の見通しは、全般としては雇用の緩やかな改善、株価上昇、消費マインドの改善などにより引き続き好調に推移するものと想定されます。しかしながら、イラク情勢の混乱の長期化や国際テロへの不安など、個人消費への悪影響が依然として懸念されることに加え、ここにきて米国や中国経済が夏場以降徐々に減速する可能性が高まってきております。

このような中、当社グループの売上高は、当期後半にかけての不透明感が残るものの第1四半期における好調さなどから中間期、通期とも当初の予想を上回り推移する見込みです。利益については、成長に向けた投資をさらに積極的に取り組めますが、売上高の増加にともない当初予想より増加する見込みです。つきましては、中間期及び通期の業績見通しについて次のとおり上方修正いたします。なお、中間期及び通期業績見通しにおける第2四半期以降の為替レートにつきましては、1米ドル105円、1ユーロ130円を前提としております。

【連結中間期業績予想数値の修正】

(単位：百万円、%)

	売上高	税引前純利益	中間純利益
前回発表予想(A) (平成16年5月6日発表)	289,000	21,000	12,000
今回修正予想(B)	300,000	27,000	16,000
増減額(B-A)	11,000	6,000	4,000
増減率(%)	3.8%	28.6%	33.3%
前中間期(15年9月期実績)	270,192	19,433	7,698

【単独中間期業績予想数値の修正】

(単位：百万円、%)

	売上高	経常利益	中間純利益
前回発表予想(A) (平成16年5月6日発表)	168,000	16,000	10,000
今回修正予想(B)	177,000	21,000	12,000
増減額(B-A)	9,000	5,000	2,000
増減率(%)	5.4%	31.3%	20.0%
前中間期(15年9月期実績)	163,218	7,180	4,137

(添付資料)

【連結通期業績予想数値の修正】

(単位：百万円、%)

	売上高	税引前純利益	当期純利益
前回発表予想(A) (平成16年5月6日発表)	610,000	50,000	29,000
今回修正予想(B)	615,000	56,000	34,000
増減額(B-A)	5,000	6,000	5,000
増減率(%)	0.8%	12.0%	17.2%
前期(16年3月期実績)	584,889	47,984	26,811

【単独通期業績予想数値の修正】

(単位：百万円、%)

	売上高	経常利益	当期純利益
前回発表予想(A) (平成16年5月6日発表)	339,000	17,000	11,000
今回修正予想(B)	337,000	23,500	13,500
増減額(B-A)	2,000	6,500	2,500
増減率(%)	0.6%	38.2%	22.7%
前期(16年3月期実績)	351,075	13,065	6,273

業績予想等は、当社が現時点で入手可能な情報と、合理的であると判断する一定の前提に基づいており、実際の業績等はさまざまな要因により、これら見通しとは大きく異なることがあります。実際の業績等に影響を与える重要な要因には、() 当社の事業領域を取り巻く日本および海外の経済情勢、() 当社製品・サービスに対する需要動向、() 新技術開発・新商品開発における当社グループの能力、() 資金調達環境の大幅な変動、() 他社との提携・協力関係、() 為替・株式市場の動向などがあります。なお、業績に影響を与える要因はこれらに限定されるものではありません。